



こころ

スクールカウンセラー

吉澤克彦

令和2年11月

非認知能力

学びに向かう力と呼ばれるものに注目が集まっています。好奇心、協調性、自己主張、自己抑制、がんばる力などに代表されるもので、従来の学力を「認知能力」と呼ぶのに対して、これらは、「非認知能力」とも呼ばれています。対人関係を良好にし、社会生活を営む上でも大切な能力ですね。

認知能力

(Cognitive abilities)

IQテストなどで知られる言語、論理、記憶、空間把握能力など主に「脳の機能」に由来する能力。

非認知能力

(Non-Cognitive abilities)

社会情動スキルとも言われるもので、好奇心や柔軟性、協調性、忍耐力、ストレス対応力など「心の動き」に由来する能力。

文部科学省が、小学校入学までの幼児期に育てほしい「10の姿」を2018年に示しました。その中には、自立心、共同性、道徳性・規範意識、社会生活との関わりなど、非認知能力の基盤になる姿が多数あります。

このことから、非認知能力は、幼児期から思春期にかけて育む大切な能力といえます。

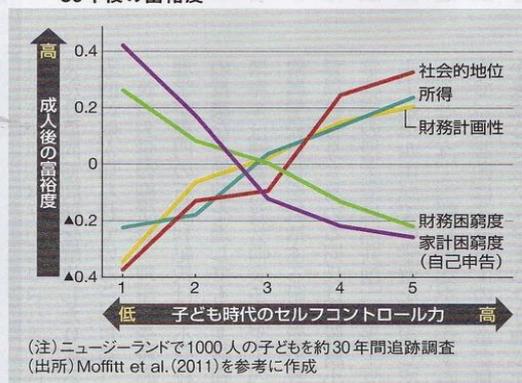
幼児に行う「マシュマロテスト」という有名な実験があります。非認知能力の一つである自制心、セルフコントロール能力等の有無を測定するものです。やり方は省きますが、追跡調査により、幼年期の自制心は成人になっての成功と関係があると報告されました。しかし、近年新たに実験が行われ、「マシュマロテスト」による差異は、経済格差による影響が大きいという見解が示され、一見、幼児期に自制心を育てることと社会的成功との関係は疑問視されたかに見えます。

しかし、別の調査もあります。右のグラフです。

成人後の富裕度が、子供時代のセルフコントロール力の強弱ではっきりとした差が出ているというものです。

なお、不適切な行動を抑制したり、創造的または長期的な計画を立てたりする脳の前頭前野の発達は、ほかの領域よりもゆるやかで、20歳ぐらいまでは十分伸ばせるという研究もあります。みなさんは、まだまだ伸びるのです。中学・高校時代に柔軟性、協調性、忍耐性などの非認知能力を十分伸ばし蓄えてほしいと思います。

■ 子どもの将来はセルフコントロール力で決まる
—30年後の富裕度—



コラム：1学期の終業式で校長先生が生徒の皆さんに紹介した、ブレイディみかこ著『ぼくはホワイトでイエローでちょっとブルー』（新潮社）は、中学生の僕が直面した差別や偏見、そして、その僕の思いや感情に向き合う母の物語（実話）です。昨年度大ヒットした書籍。子育てや教育に携わる方々、そして生徒の皆さんにもあまねく読んでいただきたい。そこで紹介されている英国の教育は、上で紹介した非認知能力を伸ばすことを目的としたカリキュラムが多様に用意されています。「エンパシーとは？」に答える僕は、その例です。さて、僕の「ちょっとブルー」とは何でしょう、そしてそれは、何色に変化していくのでしょうか。是非お読みください。この本の続きは、昨年度末まで月刊『波』に連載されていました。連載最終回は、僕のセルフコントロールにちょっとニヤリとしました。まもなく、上記の続編として最終回までの話がまとめられ、刊行されるのではないかと思います。